

今回で 11 回を迎えたこのコンクールですが、過去 10 回のうちで最優秀賞は 3 回、創作文が 2 回、論説文が 1 回受賞しています。いずれの場合も、最終的に残った 1 点を「最優秀賞にするか否か」で論議した記憶があります。ところが、今回は「最優秀候補」が 3 点あり、「どれを最優秀賞に選ぶか」で論議するという、審査員にとってはうれしい初めてのケースでした。最終的に完成度という点から、論説文の「豊かさとは何か」に決まりましたが、長編作品の「不気味の谷」も充分最優秀賞に値するというので、「審査員特別賞」を贈ることにしました。また、短編作品の「星に届く日」は、やはり重量感という点で長編に譲ることになりましたが、例年であれば、最優秀賞をとってもおかしくない、すぐれた作品だったと思います。

さて、審査員特別賞作品のタイトルの“不気味の谷”というのは、ロボット工学で提唱されている考え方で、ロボットが人間に近づくにつれ、人間はそのロボットに親近感を持つようになるが、しかしあまり似過ぎると一転拒否反応が現れ、そして人間と同じ姿になると再び親近感を持つようになるということ、その拒否反応の部分を“不気味の谷”と呼ぶわけです。SF では、ロボットやアンドロイドがどこまで人間に近づけるのか、実際に近づいた場合、両者の関係がどうなるのかは、様々に書かれてきました。この作品も、大きくいえば、そうしたテーマを抱えた作品といえます。まず感心したのは、SF としての世界観がしっかり構築されている点です。こうした作品を書きたい人はたくさんいると思いますが、ほとんどの場合、特に長編になると、読み進めると、いろいろ矛盾や綻びが見えてきて、果たしてそこがどのような世界なのかはわからなくなってくる、という場合が少なくありません。しかし、この作品の場合は、それがしっかりと作り上げられているばかりでなく、その世界のありようを、読者に少しずつわからせていく、その仕掛けもまた拔群でした。そして二つ目は、主人公の設定のうまさです。この主人公でなければありえないストーリーが展開していき、読者を引きずり込んでいきます。これが最優秀賞でなく、審査員特別賞となったのは、むしろこの作品にはまだまだ「伸びしろ」があるからともいえ、さらにふくらませていけば、一冊の本として読者を楽しませることのできる可能性をも感じました。

奨励賞となった「Green Flash」も、好感のもてる作品でした。遊園地を舞台に不思議な少女との出会いが描かれ、ストーリーが大きく動くわけではないのですが、淡々とした文章の中から、主人公の心の様子が響いてきます。これも短編の魅力です。欲をいえば、台詞（特に少女の）にもう一工夫ほしかったことと、タイトルになっている“Green Flash”をさらに印象づける仕掛けがほしかったように思いました。